

と思はれる。第一は分布の點から——即ち分類上是れと相似たものは臺灣以外の地方にも相當廣範圍に分布して居るにしても本邦としては臺灣に限られて居ると言ふ事が理由の一つ、次にこの動物の繁殖力と利用捕殺數即ち需要との關係であるが、穿山甲は一繁殖期間(一ケ年)一腹一産兒の種であり而かも逃避抵抗何れに就いても、その少ない繁殖力を補ふ程度ではないと見る可く、従つて從來鱗片の藥用、剝製骨格等標本製作用、肉の食用等相等量の需要があつたのに加へ、近時皮革の利用から急に捕獲數を増し當然相當高價に取引さるゝ事となつては、その種屬の維持といふ點でも少なからぬ脅威を感じざる事となつた次第である。

かく觀れば全島的にはその捕獲を禁止する事は最も望ましい事であるが一部本島人中にはこれを以て生活の資とする者もなきに非ず、考慮の結果先づ以て本島内四州に大小九箇所の區域を劃しこの範圍内の捕獲を絶対に禁止し、之れに依つて逐年見られたる個體數漸減の趨勢挽回の程度如何を見、保護に依る繁殖の狀況を観察し將來の計畫に資する處あらんとするものである。

**れんかく** *Hydrophasianus chirurgus* (SCOPOLI). 青木文一郎・立石新吉, 天然紀念物調査報告第六輯, 臺灣總督府内務局刊行, 昭和15年(1940)3月5日, 頁1-2, 圖版I. 臺北帝大理農動物(比較形態學哺乳動物學)

この動物は前記穿山甲とは異りその分布は全臺灣に亙らず中南部の地域に偏するものと見られて居る。我が版圖内では臺灣に限られ個體數も甚だ多いと思はれない。其の形態色彩等可成人の目を引き易い上に、池面に浮ぶ水草上の生態が頗る特異である爲めに注目せられ勝ちであり、從來捕獲せらるる機會も少なくなかつた事と思はれる。保護の方法としてはこの鳥が現に好んで營巢育雛しつゝある場所例へば高雄州舊城の池の如きを指定保存する事も一方法であるが、近い將來に於けるこの池の運命を考慮し鳥そのものを全島的に保護する事となつた次第である。

**鼠の話** (研究三十年の回顧と其の間に把持せる信念とを語る), 青木文一郎, 臺北帝國大學記念講演集第九輯, 頁1-36, 圖版10, 昭和16年(1941)

9月10日, 臺北帝大理農動物(比較形態學哺乳動物學)

**鼠の研究三十有餘年の間に獲得せし信念に就て** 青木文一郎, 日本學術協會報告, 第16卷第1號, 頁94-100, 昭和16年(1941)3月, 臺北帝大理農動物(比較形態學哺乳動物學)

上記二論文の外尙一つ第三として要報欄へ自抄を書く必要のない本誌に掲出されて居る「臼齒の形態を分類學(鼠類)に適用する方法に關する疑義」(動雜, 第54卷第2號, p. 100, 昭和16年2月)を併せ考へるのが最も合理的であるとの考の本に記述を試みる。

是等の三論文は要請された講演の性質と、許容された時間に適應して内容的に變化がある。又發行日でなしに著者が起稿した時日の相違に依り變化があるが是れ等はすべて第二義的の相違であつて、その根本を貫く精神に於ては毫末も變化はない。要點は何處迄も即應的に且つ基礎的に鼠類の分類を處理し、實際的にも科學的にも遺憾なき方法に關する考慮であると言ふにつきる。蛇足を添へるならば、第一の「鼠の話」は大衆向の講演であつたためその點が特に按配せられ、時間が充分であつた爲め、前半に相當の時間が費されて居る外、出版に關しても自由の領域が廣かつたために、自然捕獲も第二のに比し豊富である外特に參考文獻に關してはすべて此の論文に依存せしむる形を採つたのである。論義の方法に關して一言すると、第一に起稿した「鼠の話」は記載的であるが、第二、第三と進むに従ひ追々理論的の傾向が認められる。第三のは言ふ迄もなく時間と記述に關する大制約が因をなし、材料の制限が行はれると同時に、抽象的となり最も理論的になつて居るのである。此の三編の眞髓が把握せられる事は又次の「圖説」を生かす事になり、新しい關係が考慮される。

**The Rats and Mice of Formosa Illustrated.** Aoki, Bunichirô and Tanaka, Ryô, 臺北帝國大學理農學部紀要, 第23卷第4號, 頁121-191, 圖版I-XIII, 昭和16年(1941)5月, 臺北帝大理農動物(比較形態學哺乳動物學)

**臺灣産鼠類の圖説** (前者の邦語篇) 青木文一

郎・田中亮，臺灣博物館協會出版，頁1-65，圖版I-XIII，昭和16年(1941)7月，臺北帝大理農動物(比較形態學哺乳動物學)

寫生圖が追々出来るにつれて，是れらを如何なる形のものとして世に問ふ可きかといふ事が筆者の大きな迷ひであつた。此の迷ひを解いて呉れたのが畫家の重病と，開學記念講演の受諾と，友人のすゝめとであつた。かゝる機會がなかつたなれば，今日も尙かつ迷ひの中に低迷して居たのかも知れない。圖説は圖版とその説明——即ち記載——をもつて主體とする事は言ふ迄もない。従つて種名に関する論議に對しては中間過程はすべて省略せられて居るが，前記三編の骨髓は明確に顯現せられて居るつもりである。圖版は四色オフセット片面アート刷り十三葉で，臺灣産として知られた十三通りの鼠が一種宛納められて居る。本島産としては紅頭嶼の一種だけもれて居るが他は凡網羅せられて居ると考へると，本島には少なくとも十四種の鼠が居ると言つていい。原畫は或は動物に，或は植物に，挿圖畫家として已に定評のある故佐久間文吾畫伯の，凡二ヶ年半の努力の結晶であつた。畫伯は動物の生體描寫に關しては經驗も少なく，特に鼠は初めであり，大いに危まれたのであつたが，試みに手がけた最初の作品が今迄の例に反し少なくとも物になつて居た事は筆者をして先づ驚喜せしめたものである。その後二ヶ年半，技術及び速度の進歩の著しい事から，畫伯が晩年——明治元年生——に初めてかかる方面にたつさはり，精進の時間の極めて短かつた事は我國學術界の爲め遺憾千萬な事であつた。原畫が如何に立派な出來榮であつても印刷技術が是れに伴はなかつたならば折角の生態圖も全く豚に眞珠である理である。然し資材の不足甚だしき今日，少なくとも原畫と比較せない限り大した不満も起らず，その上餘程の素人でない限り實物を圖版に引き較べただけで同定する事が出来る程度に漕ぎつけられた事は誠に感謝に價する事であるが，是れは一に東京養賢堂社長及川伍三治氏の稀れに見る犠牲的努力の賜物であつたのである。記載は個體變異の觀點から全部書き變へる事が筆者の心願であつたのであるが，多年の努力にもかかわらず中々進

捗せず，一・二を除く外は，單に大方針が此の線に沿ふと言ふだけで満足し，眞の均整は他日に俟たなければならぬのが現状である。

## 形態學

*Rattus losea* の2,3の測定に於ける彷徨變異の吟味と其生物學的意味 臺灣博物學會會報，第30卷 第200-201號，頁189-201，昭和15年(1940)6月1日，田中亮，臺北帝大理農動物(比較形態學哺乳動物學)

*Rattus losea* の矢張り同一の材料に就いてその因子的均一性の統計學的吟味を試みた。吾々は本種の變異研究に依つて成長變異の比較的大なる測定群と小なる測定群とを區別し得たが，前者に入る尾長と頭蓋の間隙，並に後者に入る門齒率との3測定の成體變異が正常曲線を示すや否やを吟味してみると，門齒率以外は之を示すに至らない。従つて本材料は略同一生活環境の個體群であるから，この事實は尾の長さと同隙の長さに對しては成長の影響が大きい故であらうし，門齒率を決定する因子に關しては此個體群は比較的均一の因子型より成る事を示すと云ひ得るだらう。

*Rattus losea* の毛皮形質に於ける季節的變異 Seasonal variations in the pelage characters of a Formosan wild rat, *Rattus losea* (SWINHOE). 臺北帝國大學理農學部紀要，第23卷第2號，頁75-93 昭和14年(1939)11月20日，田中亮，臺北帝大理農動物

吾々が曩に發表した本種の變異統計學的研究と同一の材料を用いて毛皮の諸形質の季節的變異を統計的に分析した。即本材料は臺北盆地産のものに限定されたので略一定の生活環境に於ける個體群なりと云へる。此の研究に依つて刺毛の發達程度，背面下毛の平均長及び毛全體として粗硬さの諸點に於て夏毛と冬毛との間の區別を確認し得たが，毛皮の色調には意味ある季節變異を観る事が出来なかつた。現在の材料では換毛の正確な追及は不可能であるが，その存在の證據は多かれ少かれ各季節を通じて認められるが，特定の時期に特に著しい傾向は指摘出来ない。従つて以上の事實は本種の種的特異性によるものか又は地方的要因